

紫陽花の果て

内田 征士

1

薄く開いた瞼に光の洪水が押し寄せてくる。それまで頭の芯にこびりついていた重たいものが、痛みを伴ってこそぎ落とされる気がして、隆也は光を遮断するように蒲団を被り直した。

昨晚見た夢が思い出された。決まって彼を襲ってくる悪夢のことである。途切れることなく見続ける夢に、締め付けられるほどの胸の痛みを感じて目を覚ますこともあった。

だが夢から覚めて、あらためて思い出そうとしても、具体的な映像が浮かんでくることはない。暗闇の中で自分を襲ってくる感覚だけが頭の隅にはつきりと残されていて、目を覚ました後にも、その恐怖の名残りばかりが、不安を抱いた時のように重たく胸の奥にぶら下がっていた。

すでに太陽は高い位置にあり、遮る雲とてない青い空の光が、彼の横たわる蒲団にまで達している。

蒲団からそろりと顔を出し見上げると、天井板にプリントされた木目模様には焦点が合わさった。その歪んだ模様から、またもや悪夢が引き出される気がして、慌てて起き上がると、彼は部屋を抜け洗面台へと向かった。

「やっと起きてきたわね。子供と一緒に起きるとね？」

怒気を含ませながら、妻の文恵がそういった。

中学一年の娘と小五になる子供たちがいるが、朝食を共にしたことはない。彼は夕食時に家にいることがあっても、二階の子供部屋の隣室に位置する事務所に閉じ込められていて、「食事よ」という文恵の呼び声に、すべて心じることはなかった。

妻の言葉には心えないまま顔を洗い終え、食堂のテーブルに着くなり、インスタントコーヒーの粉にポットのお湯を注いで、皿に乗る固く冷えた一枚の食パンに齧りついた。

ひしめき合った住宅の間のわずかな広さの花壇にも、眩しいほどの陽光が降り注いでいる。文恵はあきらめたように、洗濯機のある風呂場に立ち去っていった。

三人の兄たちの中で育ったせいなのか、性格はさっぱりしているものの、一人娘の

勝ち気さと世間知らずの両方が彼女のなかにあった。

隆也にはそんな彼女が、高卒である彼をどことなく見下しているように思われる時がある。――あなたはだらしがない、ということが妻にはある。決まって実家のことを持ち出すのが口癖であった。

文恵の実家は、かつては雑貨商を営んでいたらしいのだが、どんなに忙しくても「はん」の声が掛ければ、全員が食卓に揃うのが習わしだったという。住み込みの店員数名とともに家族全員が揃った食卓は、毎日騒がしかったが楽しかった。誰かが遅れてきても、全員が揃わなければ食事は始まらなかったのよ――時折、そんな説教を聞かされる。家族のために夜遅くまで働いているのだからと、彼は心のなかで言い訳をした。

身体の弱かった父親がこの世を去ったのは彼が中学生の時であった。高校の卒業式の直前には、ただ一人の肉親である母親も亡くなってしまった。援助などしてくれる人もなく、見合いで知り合った文恵との結婚式のために、貯めていた貯金のあらかたを使い果たしたことが思い出された。

新婚は大阪で過ごすことになった。それまで金に不自由したことなどなかったであろう文恵には、経済的にやっと生活することができただけの、おそらく味気のない都会生活を送らせてしまった。そのことが故郷に帰った今でも引け目を感じる原因となっている。

せめて新婚の間だけでも、夜や休日には文恵の傍にいてあげることができたのであれば、引け目など感じることはなかったであろう。引き摺るように帰宅した真夜中や、後ろ髪を引かれるように仕事に出かける毎日を、彼女はどんな思いで見っていたのであろうか。

その時のことをあまり訊いたことはなかったが、取り返しのつかないことをしたような気がした。

それにしても、四十も半ばを過ぎた体は無理が利かなくなっている。神経の疲れる店の経営を年中無休でやっているのだから、家にいる時ぐらいやすらぎの時間をもちたい。

文恵もあんまりかまうことのできない子供たちも、いつかは分かってくれるはずだと、あえて口答えはしないでいた。

背後で洗濯物をたたみながら冷たい視線を送ってくる文恵を感じて、彼はまだっ

ていない不精髭を右手で撫でた。

最近、店との連絡を済ませると、彼はぶらりと街へ出ていくようになった。市内の空気を吸うことで、消費者の購買力や傾向を知ることができる気がするのだ。街ゆく人々や通り過ぎる店で働く人の表情を眺めていると、人のこれから向かっていく方向さえも分かってくるような気がした。

オープン時からの仕入れ先である流通団地の問屋では、従業員たちが在庫点検や、出荷のための運び出しに追われていた。二階は倉庫になっていて、一階の事務所横の広いロビーは、ときどき展示会場として使われている。普段はガラスケースに納められた多くの人形が並べてあった。

事務所に入ると、一番奥の机に座っている専務の姿が眼に付いた。専務は彼と同年だが、額近くの髪はすでに薄くなっていて、緩めた茶系のネクタイの歪みが、どこもなく疲れた内面を醸し出しているようであった。ゆっくり上げた顔にもわずかな陰りがある。それでも隆也を確認するなり、とっさに笑顔で声を掛けてきた。

福岡の玩具問屋に勤めていた頃から顔見知りである。展示会で紹介されて知り合ったのだが、隆也が店を始める際にどうしても地元の間屋が必要になって、相談を持ちかけてみると、専務は快く商品の卸しを引き受けてくれた。

「顔色が冴えんが、体は大丈夫と？」

夢にうなされて熟睡できないことが隆也の顔に出ているのである。ちょっと疲れてることを告げると、身体大事にしてね、お互いさまだけどね、とため息を吐いてみせた。

「そうそう、MTGカードの新作、追加分が入ってるよ、持ってく？」

MTGカードというのは、若者に人気のあるゲームカードのことである。世界中で人気があった。

隆也が頷いたとき、そこに顔を出した従業員に彼は荷をまとめるよう指示をした。

「景気はどう？社長」

実質的に社長の役割を担っている専務は隆也のことを社長と呼んだ。父親である七十を過ぎた社長は、今ではほとんど会社に顔を出すことはない。

- 厳しかねえ、そう挨拶のように応えながら、勧められる椅子に座った隆也はN社のことを口にした。以前から商品を卸していると訊かされていたからであった。

九州中に多くの店舗を出店しているN社は、地元では大企業として有名である。先月も東バイパス沿いに大型の郊外店を出店したばかりであった。N社は数年前に経営難を噂されたことがある。いまだ不況は脱し切れていないはずなのに、なぜ突然、大型店を出店したのが理解できないでいた。

途端に専務の顔にはまた陰りが漂った。

「あそこの取り引きは止めたよ」

口調が静かになっている。

「これまでも商品は買い叩かれるわ、支払いは送れるわで厳しかったとよ。もともと支払いは2カ月先だったし、なおさら問屋としては手を引いた方がいいと思って…。銀行もこのまま倒産してもらっちゃ困るから、集客の期待できる大型店の出店計画に乗ったのと違うかな？」

なるほどと思う。

「世間はますます厳しゅうなってきたみたいだね、これからは手を広げるだけじゃないかなでしょう。地道が一番」

力のない笑いを見せ、専務は独り言のようにつぶやいた。

「ここを建てたローンはあと少し。10年前にこの土地は買ったけど、あと5年、5年辛抱すりゃ楽になる。社長、お互いもう一丁頑張りまっしょう」

ここは、もともと地場に強い雛人形や節句、盆提灯を扱っていた。父親と二人で取り引き先を増やしていつて、やっと玩具全般を卸す問屋にまで発展したのだった。

駐車場に着いた頃には細かな雨が煙っていた。そこからK大近くの店まで歩いていて、軽いめまいと脱力感が彼を襲った。不規則と睡眠不足によるものかもしれない。

しばらく眼を閉じたまま立ち止まっていたが、ゆっくり眼を開けてみると、すでに視界は正常に戻っていた。

湿るほどに降る梅雨の雨の中に、隣のマンションの建物とフェンスの間でひっそりと紫陽花の咲いているのが眼に入った。車の排気ガスでくすむ葉と紫色の塊が、人を避けるように金網にもたれていた。華の一部がピンクに変色している。梅雨の紫陽花には、こっそりと咲く可憐さがあった。同時に紫色に染まる紫陽花は、遠い昔の懐かしい想いを滲み出させる。すぐにいつかの六甲の山に広がっていた紫陽花のことだと気づいた。

店の横でひっそりと咲く華の色は、その時の色とは似ても似つかない。だが、締め付けられるほどに感じた繊細な想い出が、心の奥に潜み続けていたことに彼は驚いていた。

店に入ると、ガラス・ケースの奥から顔を上げた店長の矢坂が「いらっしや．．．」といいかけた。すぐに隆也であることに気が付き、あらためて「どうも」と軽く頭を下げた。夜や休日には二人の店員を配置しているが、普段の昼間は、たいてい一人にしてある。矢坂はオープンの時から勤めていた。

低いガラス・ケースをカウンター代わりにしていて、なかには様々なトレーディング・カードが並べられていた。目に付くところに一番の売れ筋を見せるためにそうしたのだ。万引き防止でもあった。

ゲーム性を持たせたカードのなかには、印刷に光沢の施された貴重なものが混入している場合がある。そのカードでゲームの勝率がアップするのはもちろんのだが、カードそのものに高い値が付いた。5枚入りの袋の中身は外から見えないようになっていて、貴重なカードを手に入れるには、ただ買い続けるしかない。下校の時間ともなると、子供や学生たちが毎日訪れてきた。

十坪足らずの店内の中央には高さ180センチのガラス・ケースが設置しており、少女ものや昔から人気のある有名なアニメのロボットのフィギアがひしめき合っている。周囲の壁ぎわにはテーブル・ゲームやグッズなどが置かれていた。扱う物は一万五千種にも上るが、実際には人気のある五百ほどの商品が揃えられていた。

みずからはじめた店とはいえ、それまでは一般的な玩具しか知識しか持ち合わせていなかった隆也は、まるで幼い子供を相手にするような商品の数々に驚かされるばかりだった。二店舗の店はそれぞれ違う大学の近くにあって、客の多くはそこに通う大学生であった。

彼が気になっているのは、マニアックと思われる店が陥りがちな雰囲気である。独特な店だからこそ一般の人にも来てもらいたかった。

若者の飛びつきやすい商品には流行といえるものが多く、そのことも気になっている。プレミアムが付き、定価の何倍かの値段で売れるほどのものであったとしても、ひと月ほどで定価の半額になる場合もあった。そうなれば、いくら安い価格を提示しても売れなくなるのだ。一度価格が下がりはじめると、売れ残って赤字になってしまう。売れる時に在庫が無くて、需要が低下した頃に商品が入荷するとすれば最悪であ

る。工場で生産された商品が、いつも問屋にあるとは限らない。何をどれだけ仕入れるかということに、彼の頭は占められている。業者から入る情報に注意を払い、子供や若者の読む雑誌にも絶えず気を配っていた。

2

熊本の春には初夏を想わせるほど強い光が降り注ぐ。実家の周囲には田畑の風景が広がっていた。実家に立ち寄った文恵は、これから店を廻ろうと思っている。

「仕事の方はどうね？」

文恵が姿を見せる度に母は同じ質問をした。夫が勤めを辞めて始めた商売が気になるのであるが、最近では挨拶の一部のようになっていた。七十歳になる母は父に三年前に死なれてからも、兄の誰とも同居することなく独りで暮らしている。

「ずっと頑固な爺ちゃん世話はしてきただけん、逝きなはった後ぐらい好きにさせて、他人の嫁に気ば使つて暮らすより、独りで気楽にした方が楽しか、という。

リノーマチで痛む足を引き摺りながら、他の老人たちとカラオケや温泉三昧の気楽な年金生活を送っている。

一人娘ということもあって、そんな母が気になる文恵は、週に一度は母のいる実家に顔を出していた。

「隆也さんな、おとなしかけんねえ。ばってん、文恵が付いとるけん大丈夫だろうだい」
母や兄たちは一様に夫のことを無口でおとなしい、まるで養子のような婿だと噂している。今ではそういわれても、文恵はあえて逆らわないでいた。

隆也がおとなしい性格だとは今でも思っているが、脱サラするといい出したときには驚かされた。もちろん、彼女も兄たちもこぞって反対したのだが、それでも夫は出店したのだった。

夫はそんな頑固さを持っている・・・そうは思っているも、最近の隆也を見ていると、あのときの強さはまぐれだったのかも思えてくる。彼は口下手なせいか、うまく従業員に伝わらないところがあって、そんな場面に遭遇すると、やはり本来、夫には芯の強さなどないのだと感じられた。

「自分は都会には向いていない気がする。結婚して住んだ大阪を思い出す度にそう思った。大阪の出張所に勤めていた隆也に付いて行ったのだ。新妻としての夢を描いていた文恵は、夢と現実とがあまりにも隔たっていることをすぐに知らされた。

ほとんど毎晩とっていいほど、深夜にならなければ夫が帰って来ることはなかったし、休日にさえ家にいることは稀であった。

昼の間はショッピングや街を歩き廻って気を紛らわしても、やがて確実に陽は落ちていく。遅い帰りの夫を待つのは、とてつもなく永い時間を感じられた。

帰宅を知らせるチャイムに心踊る瞬間もあったが、開けられたドアには、いつも疲れ果てた夫の姿があった。彼女は努めて明るく迎えていたが、隆也は軽い食事と風呂を済ませ、そのまま黙って床に就いた。もっとたくさん夫婦の会話がしたいのに、夫の疲れた顔はそれを許さないでいた。

「休日にも休めないで、体は大丈夫？」

思い切って遠回しに尋ねると、彼の顔には笑顔が浮かんだ。

「今、大変なときだから休めないんだ」

ふたたび口が止まって途切れてしまう。

「友達がこつちにいれば、遊びにでも行ってきたらいい」

文恵より前に結婚した友人が一人だけ兵庫にいるが、すでに先週会ってきたばかりであった。他に知人と呼べる人はいない。

- - 綺麗なマンションで生活をしながら、早く帰ってくる主人を食事の用意を待つつ。それから、休日には二人だけで何処かへ出かける - - 彼女の抱いていた甘い生活の夢は早くも打ち砕かれてしまった。

同じ棟の住人とすれ違えば挨拶ぐらいはするのだが、一緒に買い物へ行ったり、楽しくお喋りすることなどなかったし、関西弁にもどことなく溶け込めないでいた。

植えられた木の葉が深い緑色を主張していた故郷の街並みに比べて、大阪では植物らしいものは見当たらない。それまで考えてもみなかったことだが、熊本では空気にさえ自然の息吹が匂っていることが懐かしく想い出された。

身籠もつたのは大阪に来てから一年も経たない、そんな寂しい毎日を繰り返していた頃である。

妊娠何か月目のことであつたらうか、夫が珍しく七時前に帰宅したことがあつた。着替えもせず、ただ項垂れてばかりいる彼に文恵は恐る恐る声を掛けてみた。

「お風呂に入つたら？」

返事することさえ忘れたかのように、動かないでいる隆也に不安がよぎった。

「どつしたの？何かあつたの？」

沈黙はしばらく続き、彼はため息混じりに口を開いた。小さな囁くような声である。「会社が倒産した」

文恵は訊き違いをしたのかと思ったが、すぐにそうでないことがわかって胸が締め付けられた。

「本社が会社更正法の適用を申請したそうだ」訊きたいことはたくさんある。だが、いくら訊いたところで倒産という事実は変わることなどない気がした。また、そう考えることで、心の動揺を押し込めようとした。

しばらくじつと胸に手を当てるように落ちて着きを取り戻すと、これでやっと故郷へ帰れるという喜びにも似た感情が徐々に湧いてきた。肉親のいる熊本に帰りさえすれば、不安や心細さはなくなる。これで味気のない都会の生活と縁を切ることができると思えると嬉しかった。

頂垂れたまま身動き一つしようとしてもしない隆也を見ながら、文恵はこれでよかったのだと思った。

生まれ育った故郷に帰ると、郊外の緑が眩しく輝いていて、その香りを胸に吸い込む度に身体中が浄化されていくようだった。

夫の店を手伝うようになったのは、彼が二店舗目を出店してからである。経理を手伝ってくれないかと頼まれたのだが、もともと数字に強いこともあって一にもなく承知したのだった。

店員のほとんどは近くの大学に通っている学生バイトだが、実際会ってみると気さくに話しかけてくるのも楽しい気分させられた。文恵は学生時代に菓子屋でアルバイトをやったことを思い出した。

「文ちゃん、余ったケーキは持って帰っていいよ」

クリスマスの過ぎた二十六日、オーナーのいった言葉に傍らで聞いていたアルバイトたちが歓声を上げた。残り物といっても、奇麗で大きなクリスマス・ケーキである。それまでも、数日経ったショート・ケーキを貰うことがあったが、この日はやはり喜びの聲が一層高くなった。

アルバイトたちに伝えることは大抵オーナーは文恵に伝えてきた。信頼してくれていたであろう。責任者ではなかったが、自然と数人の学生バイトたちを取りまとめることになった。

短大を卒業してから勤めた保育園でも、園長はとても仕事のしやすい物分かりのいい人であった。文恵はそんな園長に惚えたくて全力で仕事に没頭した。

「話を訊いていると、とても真面目で好人そうじゃなかね。最後は先生の決心だけしたい。先生が信じられる人と思うのなら、反対する理由はなかよ。」

結婚を決意したのは園長のその言葉があつたからである。

たとえ仕事は違つていても、優しく接すれば、みんなが応えてくれるものなのだ。店員にはそんな気持ちで接してきたつもりであつた。

ところが、最近、無口な隆也のことが気になりだしている。結婚してから、ずっと口数は少なかったのだが、時には何を考えているのかわからなくなることがあつた。

独立した当初はよほど嬉しかったのか、遅い時間に帰つてきても、仕事のことや来店した客のことをよく話していたのだが、最近では、家にいても静かにしていることが多い。近頃、仕事や店員に対する夫の姿勢が、彼女と微妙に食い違つてきているようにも感じられた。

「・・・今後のためにも、従業員教育を考えないと・・・マニュアルだけじゃ駄目だが会話らしい会話もないまま、急にそんなことを口走ることがあつた。なぜ駄目なのがわからない。訊き返しても同じ言葉が繰り返されるばかりで、すべては愚痴にしか聞こえなかつた。

「みんな社長の態度を見習つとよ。ちゃんと店に立つて、社長が見本を見せれば上手くいくとよ。」

学生だつた彼女の横で、客への対応の仕方を教えてくれた菓子屋のオーナーを思い出しながら、歯がゆい思いでそういつた。

「教えるべきことはすでに教えてある。俺が横に付かなきゃ仕事が出来んのなら、いつ迄経つても一人前にはならん。」

ときおり苦痛の表情を見せながら店長たちを評価する夫を見ると、口にする言葉のすべてが愚痴に聞こえ出し、ますます頼りなげに思えてきた。

ある日、店長の矢坂から尋ねられた。

「社長は何処ですか？訊きたいことがあるんですが・・・。」

反対に「社長は？」と彼女が尋ねることがあつても、誰も行方を知らないことがあつた。携帯の電源を切られていることもある。次第に不信感が募りだしたところで、店員の一人がこついつた。

「昨日、中年の女のお客さんから『あんたたち、時給いくらで働いてんの？』と訊かれましたんで正直にいったら、『よくそんなんでも働いてるね。何処でももっと高いわよ』といわれました」

下がりがちの濃い眉の下の眼が、文恵を侮辱して笑っているように見える。中年の女の蔑む笑い声が背後から聞こえてくるような気がした。家にいる時の隆也のだからない格好が浮かんできて、大阪で味わった孤独感さえ思い出されてきた。

・やはり夫は根っからだらしない性格なのだ

結婚まもなく、隆也には貯金がまったくないことを知った。

毎日、仕事だけに追われているように見えても、実際は女遊びをしているのではなからうかそんな思いがいやでもかすめる。金を使い果たした理由は他に思いつかなかった。

大阪の重苦しい部屋のなかで、文恵はそんな妄想に胸を焦がしてた。新婚だというのに、毎日、真夜中にならないと帰宅しないのは、何処かに他の女がいて、わたしと女との二重生活を送っているのではないか。文恵は誰一人として心を打ち明ける相手もないまま不安な想像ばかりを抱いて暮らしていた。

いくら苦しくても、はつきりと口にしない隆也の顔を思い浮かべて腹立たしくなった。自分だけが苦勞していてもいいさそうにしているが、これまでに一度でも文恵の本当の気持ちを汲んでくれたことがあったらどうか。大阪での孤独な毎日を過ごしていた文恵の気持ちを少しでも察していてくれたら、どれほど救われていたであらうかと、都会で耐えていたことが蘇り、心に激しい風が吹き荒れた

ふと我に帰り、傍らの店員に眼を向けた。実際、現場で働いているのはこの子たちなのだ。一生懸命働くこの子たちこそ売り上げの大部分を貰って当然だと思っ

文恵は怒気を含んだ声でいった。

「もう、社長の言うことは聞く必要はないよ。適当に相づち打ってたらいい。これからは何でもわたしにいいなさい」

家に辿り着くなり、受話器を取り労務士に連絡した。従業員の時給と手当の引き上げの手続きをするためである。それから、人を増やして欲しいとの要望のあったことを思い出し、すぐに求人広告を載せるよう手配したのだった。

・これからは従業員たちを食事にも連れていこう。利益が計上された月に臨時ボーナスを与えたなら、彼らはもっと張り切って働くに違いない。

思い描く期待に胸を膨らませながら、夫など何も報告はすまいと文恵は強く思った。

3

勤め先の倒産のために大阪から帰ってしばらくすると、量販店の臨時社員として働きはじめ、隆也は少しずつ平穏な生活を取り戻していった。

店を出そうなどという考えは突然やってきたとしかいいようがない。玩具の売れ筋情報を見ているうちに、流行の商品だけを扱う専門店を作ったらどうだろうかとの天啓ともいふべき閃きに襲われたのだった。

早速、貸店舗を大学近くに探し出してオープンしたのだが、最初は朝十時の開店時から閉店する夜の十時まで、ほとんどの時間、客の相手を彼は一人でやった。展示の模様替えなど閉店後に少しずつやるしかない。切りのいいところまでやろうとして、そのまま朝を迎えることも度々あった。世間が低迷している時期に、グッズの専門店など果たして成功するだろうか、心に渦巻く不安感がそうさせたのだ。

文恵の実家近くの町営住宅に住んでいたのだが、来る日も来る日も二十キロある市内の店まで田舎道を通い続けた。三十歳代も終わりに近い。もう後がないという切迫した思いに追い立てられるように、無我夢中で日々の仕事をこなしていった。だが、一方では、充実したものが体内に満ちていて、これまでと異なる中身の詰まった感触が感じられた。幸い大きな失敗もなく、三年目には他の大学の近くにもう一軒の店を出し、従業員も増やしていったのだった。六年が過ぎて、小さいけれどもマイホームを建てることもできた。

最近、隆也はこれまでと何処かが違っていると感じていた。集計データを基に発注したり各店に指示を出すのだが、指示に対する反応がわからないことがあるのだ。結果的には指示通りになっっていなかったりした。

翌日に確認しても、「今日実行します」「これから報告しようと思ってました」、そんな返事が返ってくるのがしばしばだった。伝達は毎日行なわれる。一つの報告が遅れ始めると、収集がつかなくなった。彼が店に出向いても、対応が曖昧だけでなく、店長の顔に心なしか反発の表情が浮かんで見える。彼はしきりに原因を考えてみたが、思い当たるものが容易に見つからないでいた。

ある日、矢坂がいった。

「社長、店は我々に任せて、家にゆつくりされたらどうですか？」

声の響きに素直でないものが感じられる。「社長といつのは陰でいろんなこと考えんといかんと。客の流れやレイアウト、他にも皆が見落とすことやなんかをね」

矢坂は黙っていたが、視線はあらぬ方に向けられていた。

「入店の客の眼に付くような場所に台を置いてメインの商材を飾るといい。万引き防止のために空箱にしとけば安心だろ？毎日同じレイアウトじゃ飽きられるばい。飾る位置も絶えず変化させんといかんね」

返事のない矢坂に向かって、促すように繰り返した。

「わかった？」

分かりました、と小さな声で応え、矢坂はすぐにカウンターにまわり、何かをせわしなくいじり始めた。

数日後にも、まだ台は置かれていなかった。「ここに合う台がなかったんで、奥さんに買っていたかどうかのように頼んだんですが、他にも購入するものがあるんで待つてくれとのことでした」

視線を合わせようとしない矢坂の眼は笑っていた。

隆也の勤めていた頃と違って、時代とともに若者の仕事に対する考え方が変化しているのかとさえ思った。近寄りがたい先輩にさえ指導を頼み込んでいた問屋時代が思い出された。

「けつたいなやつちゃ」

大阪の玩具店の仕入担当者は、ジョークを続ける隆也にそういった。八回も通い詰めてからのことである。

福岡一円に卸している玩具問屋が大阪に出張所を出したのには訳があった。京人形や雛人形など、関西から仕入れるための新たなルートを確立する必要性に迫られて、本社営業課長と主任の隆也が出向くことになったのだ。

二人の他には受付の女の子だけである。それで出張所を維持するためには、仕入ればかりでなく、大阪周辺の販売先を開拓しなければならなかった。本社とは遠く離れている。隆也は所長と二人で毎日動き回ってばかりいた。

デパートの玩具売場や、近ごろ増えてきている郊外店を訪ねていって注文を取って

いく。交渉が成立したあと、絶えず売り場に向いては卸した商品の不足を補って
いかなければならない。催事になれば、大きな売り上げの望める休日には売場に立た
なければならなかった。

新たな得意先を開拓しなければ、大阪に送り込まれた意味がなかったし、結婚した
ばかりの妻にも心配を掛けることになる。

断られるのを承知で汗を掻きながらただ挨拶をして廻る。それが隆也の大阪の仕事
であった。

何度売込みに行っても、新規の間屋には、「安けりゃ買つ」と返事が返ってくるば
かりで、相手にもされなかった。初めだけとは赤字で商品を卸しはしたものの、それ
つきりお呼びの掛からなくなったこともあった。心で大阪商人は渋いと嘆きそうにな
るが、それでも彼は百貨店や小売店廻りを続けた。

何処も二、三度の挨拶だけでは口を利いてくれない。断られても断られてもジョー
クを繰り返しながら笑顔を絶やさないでいる彼に、ある担当者が興味を持ってくれた。
八度目の訪問で、「けつたいなやつちゃん」と担当者はいった。それから得意先が少
しずつ増えていった。

文恵と店で行くわした日があった。隆也がさり気なく注意をはらっていると、店員
は文恵をちやほやと誉めたて始め、用事もないのに、傍から離れないでいる。店長も
同じようにしていた。

だが、彼女が模様替えや掃除のことを口にする、「常連のお客さんは、このレイ
アウトに慣れてますから、改めて直す必要はないと思います」とか、「まだお客さん
が来ますから、閉店後にやっときます」などと、さり気なく指示をかわしている。と
ころが、文恵には疑う様子などまったくなく、「そつね」と頷くばかりである。事務
所や裏の倉庫にはゴミ袋が無造作に積み上げられていた。

「奥さん、社長は現場の流れが分かってらっしゃいません。他にやることは一杯ある
のに、毎日のように伝達が流されてきます。すべて現場の我々に任せていただけませ
んでしょうか？」

帰宅した文恵は、店員たちがそんなことをいっていたとわざとらしく彼に告げた。

何気なく給与明細書を眺めてみると、いつの間にか全員の給料が上げられている。

隆也のはじめて知ることであった。

「文恵、皆の給料上げるなら、なぜ俺にいわん？」

耐えていた不安を吐き出すように、彼の体に力が籠もった。

「社長は遊び廻ってるくせに、偉そうにはしなすな」

近頃めつきり体力の付いてきているように見える文恵は、色艶のよくなった顔でそう怒鳴った。

「遊び廻つとる訳じゃなか」

必死に声を張り上げるが、前と比べて衰えの感じられる身体は悲鳴を上げそうになった。二階にいるはずの子供たちが様子を伺いながら、部屋の片隅で表情を硬張らせていた。子供たちには、仕事で争う親の姿は見せたくない。隆也には酒に溺れて母を殴る父親の姿が思い出された。

商売を始めたことが彼の父親にもあった。安月給ではあったが、それまで真面目に働いていた父が、ある日突然、それまでの仕事を辞めて物売りになるようになった。子供の前で両親が喧嘩をするようになったのはその頃からであった。

酒に酔い潰れた父が、母に手を上げる場面が浮かんでくる。

「わかつたような口を利くな！」

奇声を上げては殴りつけた。襖で隔たれた隣の部屋で、彼は恐さと辛さで身を固くした。沈黙が訪れた時、隣家から聞こえてくるのであるうか、微かにトア・エ・モアの歌う微かな声が記憶の底にあった。

文恵の激しく吐き出す言葉の合間に、何処かで坂本龍一のピアノ曲「エナジー・フロ」が流れた。

「皆、社長は信頼できんといってる。訊きたいことがあっても店におらん。遊んではかりいて偉そうにはしなすな」

前に口にした言葉を、文恵はふたたび激しい口調で投げかけた。

「わたしの方が、皆に信頼されてる」

・ ・ 俺の築き上げてきた仕事の何処を見てきた、と怒鳴りそうになって、常にすれ違っている文恵と彼の感覚が意識された。いつの間二人は解かり合えなくなったのだろつ。

心に仕事のできる男性像を抱いていて、いつもその像と隆也を妻は比較していると思つた。自分は自分だ。隆也は家族への責任と仕事に対する必死ささえあればいいと思つている。見せかけの格好良さや優しさなど現実の中でなんの足しになるろつ。何か

に必死に向き合っている男は、やがてよれよれの疲れた姿を曝す。それでいいではないか。

何処の仕事場でも、指示待ちの若者が増えたと聞くが、その指示さえも満足にできない従業員の存在が、運営する側にとって、どれほどの負担になるかわかってもらいたかった。だが、果たして問題はそれだけだろうか。文恵の隆也に対する不満は、出会った時からすであつたようにも感じられた。

体内には、行き詰まった思いのすべてが沸騰して、彼は両手を力一杯握り締めた。

「一切、俺の仕事に手を出すな。すべていう通りにしろ。いう通りの経理を真剣にやれ。お前が勝手にするなら現場は混乱してしまう。店は潰れてしまふぞ」

怒鳴りながら、理解できそくない妻を呪つた。狂おしいまでに熱い鬱積が胸の奥で熱を帯びた。

「お前は騙されとる。お前を誉めちぎれば、給料が上がったり我儘の通るけん皆はちやするとぞ。目え覚ませ！」

手を振り降ろせば、彼女の理解はさらに遠退くことはわかつていた。彼は一度握り締めた右手の力をそつと抜いた。思い通りの動きのとれない、はけ口のないストレスが、薄い皮膚の下にはち切れるほど充満していた。

隆也は一日に行なう作業予定を細かな表にして店に送ることからやり直した。それは今までとは異なっていて、全員へ伝えることが加わり、さらに確認と報告が義務付けられていた。

かつて何度も店員のマニュアルは作ってきたのだが、種類の多い、流行に流されやすい商材の専門店では、飲食と違って単純なマニュアルは用をなさないこともあつた。マニュアルな客の特殊な質問もあつて、即座に応えられない場合がある。原則をわきまえていれば難なく対応できる、彼は何度もそう説明したが、その原則が理解できないのが、いつの間にかマニュアルを見るものはいなくなつてしまつた。だが、今度は本気である。

この制度は予想した通り、従業員たちの抵抗から始まつた。

「どこにも負けない店を創り上げたい。そのためには命令が聞けない奴は辞めてもらおうと思つてる」

事務処理をしながらそつ口になると、文恵は思いつめた表情をして大声を出した。

「誰も辞めさせん！」

彼女のあまりの勢いに、意味が理解できないまま顔を見返した。怒っているのはすぐにはわかったが、システムを強化して従業員教育をやるうとするこの何処に怒っているのか理解ができなかった。

「簡単にそういっけど、ベテランの従業員が辞めたら店はどつなると？わたしが絶対、一人も辞めさせん」

太り気味の艶のある肌で、何かに取り憑かれてもしたかのような文恵の濡れた眼が、吐かれる言葉とともに揺れていた。彼が何かいおうとすると、制するようにつたたび激しく口を開いた。

「もう任せられん。わたしが社長になるけん、あなたは自由に好きなことをすればよか」

努めていた頃、すべてに耐えながら仕事を覚え、得意先では土下座をするほど頭を下げてきた。そうやって身に付けたノウハウで店を作り上げてきたのだ。これまで費やされた精力の意味が理解されてはいなかった。あきらかに文恵は従業員たちの意見に影響されていた。

言葉が見つからなくて、内面の怒りに眼を注いだ時、彼は家庭が欲しかったのだとあらためて気がついた。仕事へ労力を費やす彼が、それを深く理解する妻のもとで心身ともに癒される家庭が欲しかった。

失意のうちに死んでいった父親や贅沢などしなかった母親の顔色を伺ってきた彼は、安らげる平凡な家庭が欲しかったのだと思った。だが、彼の考えや態度に文恵が疑問を抱き続ければ、彼のその望みもまた崩壊する。

これまで眠りに就く以外の時間を会社作りに費やしてきたことのすべてが否定された気がした。そうじゃない、そうじゃない、と隆也は目の前の文恵に向かって心で叫んでみても、まるで重い鉄鎖に動きを封じ込められたように口は閉ざされ、次第に感情は屈辱と倦怠感にまみれていった。

その日から、彼は浴びるほどの深酒をするようになった。

萎えたまま手を滑らせると、文恵は向こうを向いて拒否するように身を固くした。昼も夜も隆也の体内には燻り続けるものが居直っている。湧き上がる欲望はなくとも、いまにもはち切れそうに積み重ねられた軋轢の壁を、何かで突き崩すことができれば、

いくらかは燻りも薄れていくような気がした。文恵との間に深まった溝も埋められるのではないかと伸ばした手ではあったが、彼女の肩の抵抗に遭って行き場をなくしてしまった。

彼はかまわずネグリジエの裾を掴んで、彼女の胸のところまで引き上げた。小振りな乳房が剥き出しになって掌に触れた。幾分か肉付きのよくなった文恵の身体がそこに横たわっていた。

横を向いたまま無言で寄り添い、その胸を彼は揉みしだいた。しかし、いつまでも反応のない身体に高まりすら見いだせなくて、徐々に苛立ちが募っていく。

乳房に当たっていた掌をゆっくりと這わせていくと、わずかにぴくりとした動きが伝わってきた。それでも文恵は身体を預けてこようとせず、身構えるようにみずから閉じたのだった。

隆也は挑むようにまさぐり続けた。やがて彼女の押さえた荒い吐息が漏れ始め、彼のなかで溶岩に似た何か次第に膨れ上がっていくのを知った。それがはたして妻を求める欲望であるのかはわからない。もしかすると、奥底に沈殿する自由を奪い去っていったマグマが、出口を求めているのかもしれない。彼は酔い潰れながら眠るうちに、得体の知れない恐ろしい夢を見た。

疲れ果てた身体を崩れるように横たえたまま、ゆっくり地の底へと落ちていった。そこは地の果てなのか落ちたところには何も無い。辺りには境目のない闇だけが漂っていた。ただ、包み込まれるような静かな安らぎがあった。

闇に思える空間はまったくの光りのない暗黒のではなく、何処かから来るぼんやりと薄い明かりが漂っているようでもある。まわりには何も無いはずなのに、ひっそりとした森にでも紛れ込んだ気分だった。そんな気がするだけで、掴み所のない世界は果てしなく無限の広がりがあるようでもあった。

本当にそんな夢を見ているのだろうか。朝になると、そんな疑いが湧いた。ときには胸に息苦しさを感じて、夢の途中で目を覚ますこともあった。

夢の回数が増えていくうちに、夢のなかの薄暗い風景が少しずつ変化している気がした。視覚でそう感じる訳ではなく、なんとなくそういう気がするだけである。やがて同じ夢は毎晩彼に訪れるようになった。

ある夜、眠りの奥でぼんやりとした暗闇が彼を取り巻いた。どんな世界かもわからないまま佇んでいると、それまで彼の抱いていた不安が徐々に形作られていくのだっ

た。モヤのようにそれまで霞んでいたそれは、次第にとぐろを巻き始める。そこで朝がきた。

不安によって形作られていったものは、夜がくる度に隆也の前で何かに変わった。ただのモヤの時もあったし、別の日にはマントのように翻ったりした。日を追うごとに、重々しい闇の黒さと迫力が増していくように思われた。

何かの象徴のように眼前に立ちはだかっているが、それまで彼の見た何者でもない。隆也は起きてから何度も具体的に思い出そうとするのだが、姿や形など表現できるものは何もなかった。

やがて、胸が締め付けられてきて、それが現れる度に恐怖と苦しさが増していく。いつの間にか圧倒的といえるほどの恐ろしさとなって彼を苦しめるようになった。

息が止まる。渦の中心辺りに果ての無い暗黒を湛え、怪物ほどに育った様は、まるで引き摺り込もうとする地獄の釜であった。逃げなければ、逃げなければ、切羽詰った思いたせけが喉に絡まり、恐怖にのたうち廻りながら目を覚ました。来る日も来る日も同じ夢を見た。

真夜中に恐怖で泣き叫ぶ自分の声に驚いて起きたこともあった。まだ夜明けには程遠い闇にあつて、硬直した背と冷たくなった手足をなんとか動かそうともがきながら、蒲団のなかで唸り続けていた。

得体の知れないものは、何万匹もの蝙蝠となって飛び交うこともある。音を発てて立ち昇る巨大な原爆の雲に見えることもあった。

何度も夢を見るうちに、彼は朝になると刺すような胸の痛みを覚え始めた。眠ることに不安が生じ、まわりから、身動きの取れないほどの圧迫を感じるようになっていった。

真夜中になれば苦しそうに唸り声を上げ胸を掻き抱く隆也を、横では文恵が不思議そうに覗いていた。

会計事務所の所員の持参した決算書に眼を通しながら、隆也は落胆の色を滲ませた。

「何だ、この赤字は」

思わず誰かをなじるような言葉が漏れた。

仕入れの支払いを終えると、残りの金はすべて利益になるとも考えていたような日頃の文恵の態度を思い出した。いつも税金対策を口にしてはいたが、実際はまるで反

対の行動をしていた。設備投資や次回の仕入れのためにプールしておかなければならない資金を、スタッフの臨時ボーナスとして振舞っていたのだ。また、店のスタッフが「これは絶対売れます」といえばその数量だけ仕入れさせていたことも思い出された。これまで人知れず頑張ってきた彼の努力は虚しく消えた。

睨み付ける隆也に、文恵は黙ったまま俯いてばかりいた。

「売買状況を見ますと、運転資金を借り入れるのにも無理があります。ここで一度、精算されてはいかがでしょうか？」

所員は遠慮がちにいった。

「精算というのは閉めるということ？」

静寂が漂った。

翌日から彼は棚卸しをしながら、正確な在庫の数字を掴むことからはじめなければならなかった。誰の手も借りずに、一つ一つを数えながら在庫表に記入していく。

数日掛かって書き上げた表を見直すと、売れ残りの在庫が数多くあった。すでに旬が過ぎたものばかりである。それはただ同然の値で現金問屋に買い取ってもらっしうしか手はなさそうであった。商品を段ボールに丁寧に梱包しながら、彼には虚しさが込み上げた。

さらに何度調べても、仕入れと売り上げのバランスが合わないところもあった。いくら探しても、店の在庫としてあるはずの品物が消えてしまっているのだ。

「そんなはずはなか」

文恵はあたかも隆也の棚卸しの数字に間違いがあるともいわんばかりであった。

矢坂を問い詰めてもしらばっくれているばかりである。隆也は矢坂をクビにした。ところが、その途端、他の従業員たちもまた辞めていったのだった。

はち切れんばかりの自信に満ち、隆也を見下していた頃の、輝いていた妻の姿はすでになく、その暗い顔には脆く壊れそうな雰囲気漂っていた。飛んでいってしまった。そんなほど軽々と浮かぶ風船からやがてガスが抜けていくように、そこには艶やかな張りはすっかり失われてしまっていた。

せめて今抱えている商品の展示に変化を持たせようとあらゆる工夫を凝らしてもみだが、人気のある商品の少なくなった店からは、次第に客足が遠のいていった。問屋への支払いは遅れはじめ、やがて銀行からの借り入れさえ断られてしまった。

パラグライダーをやらなかと向井から連絡が入ったのは、なんとか店を立直せたいと、空しいほどのあがきを繰り返している最中であつた。

向井というのは、隆也からノウハウを教わり三年前に同業の小さな店を出した三十代の独り者である。

彼の店の人気の商品にスポットライトを当て黒で統一した雰囲気は、洒落たブティックを想わせた。店内には常にセレクトしたジャズナンバーが流されていて、ジャズ喫茶と見間違つほどであつた。そんな店を経営する向井は、何の規則に縛られることもなく自由に生きてるように見える。ときどき隆也にも連絡をくれた。

受話器を握りながら、こんなに体力の衰えた状態でパラグライダーでもなかつと考えていると、

(気分転換にどうですか?)

いつもの気張りのない声が聞こえてきた。

社長になる、と文恵が断言した時、隆也に何かがつつり切れたような脱力感が襲つた。無駄だとはわかつていても、わずかな現金で少しの商材を仕入れてきては、数少なくなつた商品を並べ直したりしていた。

早く次の何かに向かわなければ、すべてが駄目になってしまう。新たに、少しずつ、何かを始めなければ。追われるようにそんなことを考えていた隆也に、向井の言葉が引つ掛かつた。

- - 気分転換にどうですか?

なるほど気分を転換すれば悪夢など見ることもなくなるのかも知れない。そんなことをぼんやりと思つた。

来月になったら阿蘇に行つてインストラクターから教わるのだという。自分もはじめてだからと電話の先で向井が付け加えた。

隆也は空を飛ぶ様を思い描いた。軽やかに舞い上がり、誰にも邪魔されず重力の束縛から解き放たれる姿が浮かぶ。

趣味らしいものなど何も無い。これまで、ゴルフに行くのでもなく、暇を見つけては映画に行つたり、知り合いと飲みに行くことぐらいしかできないでいた。たとえば時間があつたとしても、毎日の動向や、仕入れのことが頭から離れないでいた。

大津近くにある事務所を出発したのだが、狭い国道は観光の車でにぎわっていた。車の窓から秋の匂いが流れ込んでくる。山並みの樹木は緑の色を深め、やがて来る季節を漂よわせていた。

太陽を遮る薄い雲が空一面を覆っているのを見て、昨夜テレビの天気予報で、低い降雨率を伝えていたことを思い出した。

三十過ぎの田島と名乗るインストラクターは、いかにもスポーツマンらしいがっしりとした体つきの男である。彼は渋滞を抜けると、巧みにくねった道を軽やかに運転し、阿蘇の牧場の幾つかを過ぎた頃、小高い丘の近くに車を停車させた。それから荷物を持ち、二人にも荷を持たせて丘のてっぺんまで登るよう促した。

丘の頂上まではなだらかな坂になっている。それでも隆也には足が重く感じられてきて、頂上に辿り着く頃にはすでに疲れさえ感じていた。

湿気を伴う風になびかされる草原が遠くまで延び、彼方の山々へと結ばれている。

広げたパラシュートのベルトを身体に付けさせたあと、インストラクターの男は、二人の傍で説明を始めた。

- 操作ヒモを同時に引けば下降できます。最後にそういった途端、彼は丘から飛んでみせた。風に乗ったみごとな様子を見ながら、向井は「ほおう」とため息を吐いた。

丘の上に戻ってきた男は、さっく向井に飛ぶようにいった。彼が走り出そうとした時、吹きつけてきた向かい風に乗る、彼の身体が必要以上に上へ浮き上がった。

「落ち着いて、少しヒモを下げて」

いわれる通りに向井が軽く両ヒモを引くと、ぶれていた身体は安定し、やがて滑らかに滑っていった。

「さあ、準備して」

小さくなった向井の姿が地上に降り立った頃、男は隆也に飛べと命じた。

パラシュートの端を持ち上げた時、髪が大地を吹く風になびいた。彼方の大気が霞んで見える。遠くに広がった霧のような雲の横から、湧き上がる厚い別の雲が割り込む様子が眼に映った。

彼が一步踏み出すと後ろのパラシュートが広がるのが引っ張られたことわかる。

- 足を止めずに丘の端から飛ぶのだ

呪文のように頭に浮かべ、前方へと傾けた重い身体を端から飛び出させようとする

と、強い風がやってきた。それから向井がやったように、全体をふうと浮き上がらせた。不思議なことに身体だけでなく意識までもが浮き上がり、目に見えないものに乗ったと思われた。身体が宙に浮いたまま静止している。風が止んだのかと彼は思った。別な世界に迷い込んだようでもある。それは動こうとしても動かないでいる澱んだ心が開放された気分でもあった。しばらくすると、またもや滑るように前に移動していくのが感じられた。ゆっくりと前進していきながら、ふたたび隆也はぐんと引き上げられた。

草原を抜ける風が顔を打つ。それはさらに強さを増していて、吹きつけるように当たってきた。その度に身体がぐいと上昇していった。

「ヒモを引け！下降しろ」

風音のなかで眼下の丘からしきりに叫ぶ二人の声が途切れ途切れに届いてくる。向井とインストラクターの慌てた様子が可笑しかった。

空を滑る度に絶え間なくパラシュートは押し上げられていく。下には曲がる道路と停車しているジエミニがあった。

体重のないゆつたりとした非日常的な世界。宙を浮きながら漂う感覚が海とも空とも感じられた。

隆也は重力に反する浮遊感のなかに、どこか懐かしいものを覚えたが、それは幼い頃に描いた何かの夢のことであるような気がした。しきりに思い出そうとするのだが思い浮かばないでいた。ただそれは、仕事のことだけしか頭になかったこれまでの生活とは、ずっとかけ離れたところに存在するもののように思われた。

- - パラグライダー、彼は何度も子供のように口にしてみた。

曇り空さえどこかに懐かしさが宿って見える。すぐに、それは空そのものではなく、遠い昔の曇り空の下のことであった気がした。いつか何処かで何かをじっと見つめている場面がある。何処であつたらうか。彼はパラグライダーに身を委ねながら、しきりに考えていた。そして、ふいに曇り空の下に咲く紫陽花を思い出した。

それは、営業で大阪から神戸に行った時のことである。文恵と出会う前のことであった。早く用事が済んだこともあって、急に六甲の山から見下ろす神戸の街並みが見たくなり、街の外れから山を目指して運転していた。そのときの梅雨の空も、ちょうど今のように、青い空を覆っている曇り空であった。

住宅の坂道を不案内のまま迷っているうちに、いつのまにか小さな道路は草と雑

木の生える場所へぶつかり、まったく先には進めなくなってしまった。

傍には看板だけでそれとわかる地味なラブ・ホテルが隠れるように建ち、それに沿うように樹木や深い草の緑が続いているのだが、正面だけには高い木がなく、かろうじて草の途切れるところに灰色の空と眼下に霞んで小さく神戸の街が見えていた。

車を降りた隆也は、思わずその場に立ち尽くした。山の中腹になるこの一郭には、まるで林に守られるかのように、眼の覚めるほどの紫陽花の華が咲き乱れていた。

山の頂上に向かうことだけに注意していて、隆也は車を降りるまで華の色に気づかずにはいたが、紫陽花は彼が生まれて始めて見る、純粹としかいいようのない青さを保っていた。彼の胸の奥へと溶け込んでくるほどの、一面に青く咲き乱れる紫陽花があった。

花畑のようにも見えない。公園のようにも思えなかった。艶を帯びる緑の葉に包まれながらも、わずかほどの不純な色の含まれぬ真つ青な色が、囲まれている葉の緑に滲むことなく、はっきりと主張しながら連綿と続いている。やがて華の群れと空との境界線は溶け合っていた。

晴れた日の神戸の空を、紫陽花の花弁の塊の連なるその色で被うならば、きっと世界の果てにまで通ずるような景色が現出するに違いないと想わせるほど神秘的な色合いであった。深い青の色を抱く紫陽花は、そこにただ静かに咲き誇っている。

五月間のような体内の疲労を感じていた隆也は、身をも染め尽くすほどの青い色彩に声が出せないほどの感動をしていた。

時折風に吹きつけられながら、妻のことが頭に浮かぶ。

・文恵とは何処ですれ違ったのだろう。もっと優しさのある女であったはずだが、最近では、仕事に対する隆也のすべてを否定しているようにも感じられた。何が気に入らなかったのだろう。

記憶を辿るうちに、大阪で遅くまで仕事に追われていたことを思い出した。新婚であつたにもかかわらず、自分の記憶のなかは、会社に対する責任と夜遅くまで引き摺られるようにこなしていた仕事のことしかなかったような気がした。休むだけに帰っていたマンションで、毎日彼女は何をし何を考えていたのだろう。

ほとんどを小さなマンションのなかで暮らし静かな表情を見せていた文恵に、隆也に逆らってまで会社を動かそうとするエネルギーな姿は何処にも見当たらなかつ

た。

夜遅く帰ってきた時、「お帰んなさい」と迎えてくれた彼女には、口には出さなかったものの、何かを訴えようとしていたような表情のあったことをあらためて思い出した。

草原は途中で切れ、落ち込んだその先が淵のように深く沈んでいて、畑と集落が小さく見える。右と左に連なる外輪山に天と地が被さり、その真中を移動していく様はまるで進むべき目に見えない道を進んでいくようであった。

一時は下降していくかに思えた彼の身体は、ひゅんと向かい風が音を立てる度に、ぐいと押し上げられた。それは次第に前方の厚い雲へと近づいていくようであった。

空を被っていた薄い雲はいつの間にか渦を巻く厚い層になり、それまでの穏やかな表情をあきらかに変えていて、雲は風とともに渦巻く巨大な生き物へと豹変していた。彼方には光が雲の厚さに遮られていて、蠢きながら張り出す下方の雲を墨のように黒くしていた。乱れた気流は身体を大きく揺すりパラシュートをがくんと落ち込ませ、さらに上へと押し上げる。横へ流され左右に揺れた。

突き出た雲の端が次第に彼を包み込んでいった。どうにでもなれという気になったが、視界の遮られた雲のなかに入ると、周囲の乱れは感じられなくなり空気の流れが穏やかになった。さきほどの激しい気流はなく、ただ薄暗い闇に包まれていて、進んでいるのか浮いているのかさえわからなくなり、時は止まったように感じられる。景色と風が閉ざされた世界で、恐怖が彼を襲ってくることはなく、時の流れは完全に失われていた。

ぼんやりとしか光の感じられない雲の先に、突然目も覚めるような青い色彩が隆を覆った。眩しいばかりの色彩はやがて連綿と続く緑の葉に包まれた紫陽花の華となった。眼前の青い光はやがて彼の心を貫き、覚めるような紫陽花の青い色は心の隅々にまで満ち満ちた。今安らぎに似たものが彼には訪れていた。染め抜かれた青い青い紫陽花の色が、雲を突き抜けた地平線の彼方まで広がっていると想った。

やがて途切れるに違いない雲の前方に向かって、瞬きさえせずに隆也は眼を見開いていた。

(おわり)